



AGRE



klshl

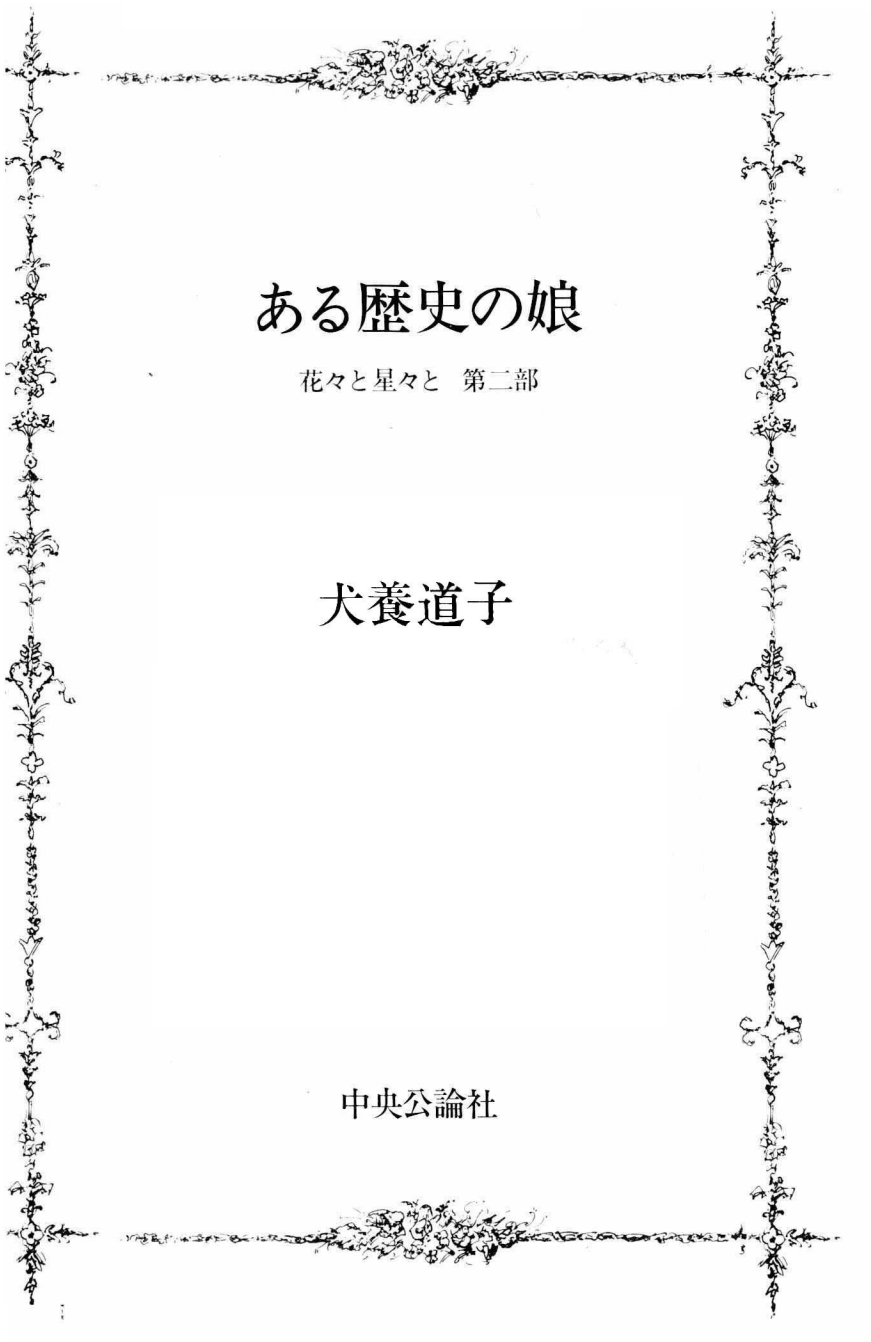


uo

MG



sg w

A decorative border with floral and vine motifs surrounds the text. It features a horizontal band at the top and bottom, and vertical bands on the left and right sides, all connected by ornate corner pieces.

ある歴史の娘

花々と星々と 第二部

犬養道子

中央公論社

ある歴史の娘

©1977 校印廃止

昭和52年9月25日 初版

昭和52年11月15日 3版

著者 犬養 道子 発行者 高 梨 茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2-1 電話(03)(561)5921(代)

目次

北の南の人

つゆ冷え

問
い

借翠宝蘭亭斎

日記の周辺

青い手紙

判
決

夏の客

熊と切手

楽学（幕間のとき）

「七月七日」

7

29

51

71

91

113

135

157

179

201

223

津田

青春の嵐

長崎の前後

和平工作

汪さんと言う人

揚子江

フランス租界

夜会服

ひとつの林檎

ヴィタ・ヌオヴァ

あとがき

243

263

283

301

321

341

361

381

401

421

442

装幀・カット
秋山
正

ある歴史の娘

北の
南の人



五・一五事件は、言うまでもなく一大社会的事件であつた。

同時に、歴史を画^{かく}すると言う意味あいに於て、まさに歴史的事件であつた。本書の前篇である『花々と星々と』の文庫版解説において、評論家、元朝日新聞学芸部長の扇谷正造氏が左のごとく書かれたのは妥当である。

「……けたたましい号外の鈴の音に驚かされた。手にとると、『犬養首相、兇弾に倒る』コブシ大の活字が目にとびこんで来た。私は思わず（とうとう来たか！）と思った。一瞬、目まいがし（銀座）一帯が灰色一色にぬりつぶされた。……（号外の）一行の中に、我々の世代の青春は抹殺された……」

五・一五の拳銃の音はそのままに、太平洋戦争序幕の音であつたから。日本の議会政治敗惨の音であり、軍及び軍と手を握る大企業（当時の言葉での財閥）——たとえば鮎川義介のニッサンコンツェルン等——独走による「狂」の時代の幕開けの音であつたから。

とは言え、狙い撃ち^{うち}にされた当の犬養の家に限つては、事件ののち、一種不思議な——そう、

安堵感と言ってしまったては些か語弊があるが、それにも通じる静けさが訪れたのであった。

勿論、事件は一家全体に取って、めくるめくドラマであったし、めいめいの受け取り方には相違があるうとも、家族ひとりひとりのその後の人生に、永く尾を曳く強烈な個人的体験であった。とくにも、唯一の現場目撃者でありながら「むぎむぎと（舅木堂を）撃たせてしまった」嫁である母の苦悩は深かった。

しかし、その彼女すらも含めて、一家全員が、安らぎとも解放感ともつかぬ氣持を味わうようになつたことはたしかである。

来るべきもの——のがれっこないもの——は、来て去って行つた。月並な表現を借りれば、嵐のあとの静けさ。

嵐はすさまじく、むごかつた。破壊力に満ち溢れていた。しかも、もっと大きな嵐を早晩余波として送って来ることをはっきり示す嵐であつた。とは言え、とにかく、去つたのである。

安堵の底にはまた、「お祖父ちゃまはその性格の最も善い面だけを十二分に示し出して、こう死にたいとつねづね念じていた通りに死んだ」と言う、以て瞑すべし賀すべしの爽快感もまじつていた。爽かさを人に味わわせる死と言うものはあるのである。

祖父犬養木堂と言う人の、強烈極まりない個性の中には、白と黒ほどの対照をなす、実にイヤな面と、限りなく美しい面とがないまぜに入っていた。死に際してしかし、彼は柔和さと、劇的な一切を排し淡々たる平常心で天命を受ける大らかさ——つまり彼の美点を出し切つた。その意

味で彼は幸なる人であった。

女中たちや玄関子の名で呼ばれる多勢の書生や子郎党まで、彼の死に爽快なものを見て取り、あれでよかったと心に思っていたのである。犬養の邸内は、悲哀の中にもいっそ、明るく落ちついたと言つてよい。

実際、昭和六年末の大命降下、内閣組織、官邸への引越の時以来五・一五の日まで「何か起る、何か起る」と待ちつづけた——と言うと奇妙だが——あの重苦しい緊張感と不安感こそ、たれにとつてももう、耐えられないものだったのである。

たったひとり。

そういう犬養の家の空気をわかちあひもせず、さりとして五・一五の社会的性格の重大さを見てとりもせず、その事件をわが身ひとつの個人的悲劇とのみ受けとつて、黙念と邸の一隅に坐す人がいた。

その人は、お祖父ちやま生前にも、ほとんどしょっちゅう、そこにいた。私はそれを見て知っていたが、別段の注意を彼に対して払つたことはなかった。

払えと命じられたつて、そんなことは無理であつた。何しろ、お祖父ちやまもお祖母ちやまも、女中頭のテルも女中たちも、十数人時に数十人の玄関子も、「だれもだれだか知らない」全国から連日上京して来たり、毎日「出勤して」やつて来る「憲政の神さま（お祖父ちやまがもらつてし

まった別名」支持者が、正規のこれまたおびただしい数の客に加えて、どこにもかしこにも溢れているような「政治家の家」で、よほどの奇癖でもない限り、「いつも坐っている」ひとりの人をとくに記憶にとどめることは難しかった。

廊下にまで客が溢れっぱなしの、プライバシーなど棄にしたくもない家の、北のベランダと呼ばれた十二畳ばかりの空間にその人はいた。

陽の当らぬ、眺めのごく限られたその一隅を、陽の目のついに当ることなき運命のわが身に最もふさわしい場所とえらび取ったごとくに。私の記憶にのこるあのころの彼は、粉をちょっと吹いた感じの、小豆色を帯びた茶色の背広を着ていた。袖の寸が少しつまってワイシャツの手首が普通以上に多くのぞき、ズボンは布がもはや古いためか、これはおしゃれで身だしなみに人一倍やかましい父の、まるでナイフの刃のような折目のピシヤリとついたズボンとはくらべものにならなかった。一語で言えば、その人はつましい生活ぶりを一見、人に告げるていの中肉中背の人であったのである。しかし、つましく貧しく見えても、野卑とか俗とかの気配はみじんもなく、卑屈なところも全くなかった。

背のまっすぐなしかし妙に坐り心地のよいライト式（旧帝国ホテルを設計建築したアメリカの建築家ライト氏のデザインによる）の、「ベランダの椅子」に、足をそろえるでもなく組むでもなく、ゆったりと逆八の字に投げ出して坐る。

あとで考えれば、あの坐り方は、身分高き東洋人の、悠揚迫らざる腰かけ方であつたのであ

る……

彼は黒い細縁の眼鏡をかけていた。もはや多くない胡麻塩の頭髮は、いつもきちんと、櫛目分け目を見せて中央から左右にかき上げられていた。眼鏡の奥には、少しく吊り上った、二重瞼の重い眼があり、眼鏡の上には濃く豊かな眉。鼻は筋が通っていたが、その筋肉は厚かった。否、鼻だけでなく、唇も頬も。笑いを忘れた口元には、頑かたくななものがあらわれ、口は表現のためとよりはむしろ閉鎖のためについているようであった。鼻翼は眼と同じく一度吊り上ってから、大きくふくらんで、顔の中央に太い線の影を描き出していた。眉間には深い皺がたてに掘りこまれ、皮膚の色は蒼みをおびた濃い褐色であった。

年のころは、五十一、二歳。ふとした動作や、いや第一に、顔の肉のつき方が、彼が日本人でないことを物語っていた。

北のベランダで彼は何をしていたのか。

時には、開かれた書物が膝の上にあった。

たまにはお祖父ちゃまにねんごろに導かれて、第一応接に入った。五・一五のちは、父にこれまた丁寧に導かれて、「だいたいなお客様」の部屋に入った。第一応接に入った日、彼はいつもより快活に早く帰って行った。

一度、いとこたちと鬼ごっこのさいちゅうだったか、入ってはいけないその部屋に、切羽つまって飛びこんだら、父の手から彼の手に、大きな部厚い封筒がちょうど渡されている瞬間だった。

「なんだ、なんだ、あっちだ……」

人を追い払うときの父の口癖が咄嗟に出て、私は反射的に飛び出した——が、子供の心にも二つのことがあざやかにのこされた。ひとつは、渡されたものが金の包みであったこと。もひとつは、金と言うものはもろう方が一応謙りくだるものなのに、あの人はあたかも献上品を受ける者の態度で、当りまえのような顔をして、静かに受けとっていたのである……

——ほとんどの場合、彼は、玄関と奥を結ぶ広い通路でもあった北のベランダをしょっちゅう小走りに往来する書生たちや子郎党に、一顧も与えず、うるさがる風も見せず、孤立の雰囲気に包まれてじっと空中のどこかを見ていた。自分がそこに居坐ることが、人に迷惑を与えるかどうか、そんなことはてんから眼中にない、のであった。

時は彼のまわりで停止していた。

五・一五ののち、百ヶ日がすむと急に表面に出て来た玄関近辺や客たちの新旧交替も、彼をベランダから動かすことは出来なかったから。

「若先生をかつぎはするが、何と言ったって若先生は駆け出しじゃて——上京して来るまでもないわ、の……」

古い人々は、「家の子飼の郎党」数人をのこして少しずつ去って行った。護衛の私服ももういらなかったし、第二応接間にべったりいた記者連中は、同じ四ッ谷の坂ひとつ越えた向うの斎藤実総理大臣（五・一五のあと内閣を組織。子爵、海軍大将、一九三五年内大臣、二・二六事件で暗殺さる）

のお宅や、外苑の森のかなたの高橋是清翁（犬養内閣・斎藤内閣・岡田内閣蔵相、二・二六事件で暗殺さる）邸に陣を移したようであつた。

だが——彼だけは相変らず物思ひ眼つきをしてそこにいた……いま思うと、彼はどこでいったいごはんを食べたのだろう。家族の食事に彼は招かれたためしはなかった。母は氣がるに人を招く人なのに。

「ねえママ、あの人、だれよ、あの北のベランダの茶色の人……」

母にそうたずねたのはいつごろであつたろう。五・一五の前であつたようにも思われる。

「どなた、とおっしゃい」

と母は私をチラと見て言った。

どなたは敬語である。あ、あの方はやっぱり曰くづきの人なのだ——好奇心が波のように昂ま
つて、

「ねえママ、どなたよ」

母は私のその好奇心をちょっと焦らすように持ってまわって、

「南さん……」

南と言う姓の存在することを私はとくに知っていた。

母の父である——つまり私にとっての母方のお祖父ちゃま——日本胃腸病学先達・泰斗のドク